

女性教養

1995 **11**

婦人教育・家庭教育情報誌

C O N T E N T S



巻頭言

さらなるエンパワーメントへ

—西暦2000年へのエネルギー源として—

藤原 房子… 2

◎ 目で見るNGOフォーラム

—第4回世界女性会議・北京から—

本誌編集部… 3

女性施設クリップぽ〜ど 男の生活学（札幌市女性センター）…………… 7

ワークショップ

◎ 女性とメディア

米田 禮子… 8

ワークショップ

◎ パネルで示した「教育」「開発と女性」

静間 敏子… 10

Women's View …………… 12

このひと 板東 久美子さん（文部省生涯学習局婦人教育課長）…………… 13

ぎょうのキーワード 夫婦別姓・離婚 …………… 13

シネマ女性学 『杉の子たちの50年』 …………… 14

ざ・ぶっく …………… 15

さらなるエンパワメントへ — 西暦2000年へのエネルギー源として —

ふじわら ふさこ
藤原 房子

第4回世界女性会議のキーワードの一つはエンパワメントだった。女性が自らの能力を育て、社会を変える推進力になることを意図しており、開発途上国では女性の識字率を高め、自立への技術等を身につけることを、先進工業国では持てる力を発揮して社会に参画、自己実現することなどを含んでいる。

懐柔県でのNGOフォーラムでは、多数の団体が会期中、五千ものワークショップや展示等を行い、精力的に語りかけ、活発な議論が各所で飛び交った。私が訪れた雨の日、入口から遠い隅っこのテントで韓国のNGOが開いた家族問題のワークショップでも、少数ながら熱心な議論が続き、日本人女性が英語で親の負担する教育費と親子関係につき数字をあげて問題提起するなど、外国の団体が主催する会に一人で乗り込んで話し込む光景も珍しくなかった。

また市内の国際会議場で開かれた政府間会議と並行して、近くのビルを会場に、連日多様な課題ごとにNGO女性による五、六十のコーカスが開かれ、多くの場に日本人の顔が見えた。コーカスとはアメリカでは政党の幹部会、ひいては政策決定や作戦会議の場である。アンペイド・ワーク（無報酬労働）のコーカスではベティ・フリーダが熱心にメモをとっていたし、女性と政治参加の会にはマリア・ティーレ・ヴィツティヒ国際家政学会会長も議論に加わっていた。

そんな場に日本女性も臆せずに肩を並べ、対等に発言している。エンパワメントを絵に描いたような姿を見て、さらなる充実をと欲張りたくなった。

■プロフィール

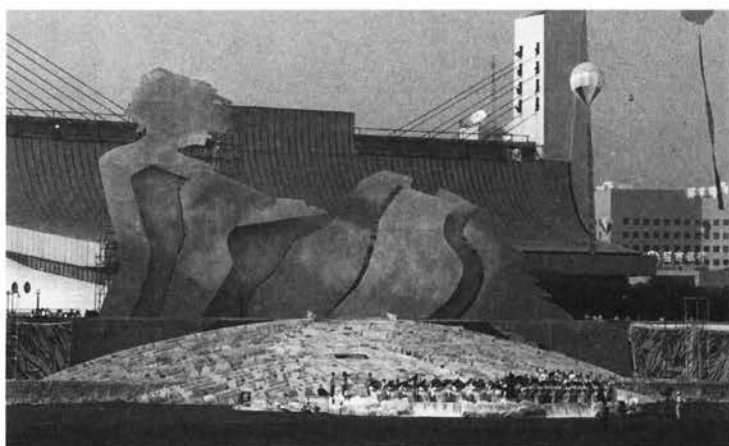
ジャーナリスト。日本経済新聞編集局社会部記者等を経て、同婦人家庭部編集委員、1991年度日本記者クラブ賞受賞。1994年4月から商品科学研究所所長。公職として男女共同参画審議会、生涯学習審議会委員ほか。財日本女子社会教育会理事。著書に『手の知恵』（第一回サントリー学芸賞）、『男も変わり目』など多数。

第4回世界女性会議

特集

目で見るNGOフォーラム

第4回世界女性会議～北京から～



1985年のナイロビ会議から10年目、今年9月、第4回世界女性会議が北京で開催されました。今回の会議の大きな特徴として、政府間会議（9月4日～15日）に先立ち、8月30日～9月8日の間、世界中からかつてなかった規模の約3万人の女性が集い、「女性NGOフォーラム北京'95」が北京市郊外の怀柔県龍山地区で開催されました。日本からは約6千人の女性が参加したといわれています。フォーラムのスローガンは「女性の目で世界を見よう」。「世界的な女性運動についてのアジェンダ（予定表）の設定」「ネットワーキング」「国連の政府間会議に影響を与えること」を目的に、約5千に及ぶさまざまなワークショップ（分科会）やコーカス、イベントが行われました。このフォーラムには本誌編集部も参加しましたので、その女性たちの熱気とパワー溢れる模様を、取材写真でお伝えします。



NGOフォーラムのロゴマークは、8大陸を表す8人の女性たちがエネルギーに踊る姿を描いています。

8月30日、開会式。オリンピック・スタジアムを埋め尽くした女、おんな、女性……。

フォーラムへの期待と、女性オーケストラの演奏、一糸乱れぬマス・ゲームに、参加者総立ちで拍手！拍手！拍手！

◀オープニングセレモニーの終盤、総立ちでハンカチを振り合い、盛り上がる参加者たち

▼陽気に歌い民族楽器を鳴らしながら開会式場に入場するアフリカの女性たちのパワー



◀NGOフォーラム会場の入口ゲート。ここから先はIDカードを持たないと入れない



ともに!

障害をもった人も、子連れの女性も、少女も





語り合う女性

NGOフォーラムの会場は、国際会議場やホテル、中学校等のほか、何張も張られたテント。会場によっては入念な持ち物検査が行われていました。参加者は、42ヘクタールという広大な会場内を、200頁にも及ぶプログラムを片手に、関心・興味あるワークショップやイベントに参加し、熱心な討議や交流を行っていました。

ワークショップは「人権」をテーマとしたものが最も多く、「平和・安全」「教育」「経済」「政治・統治」の順でした。中には準備が間に合わず、中止となったものもあったようです。若者たちの討論の輪がいくつも見られた「ユース・テント」もユニークな試みでした。



アピールする女性



▲政策決定への女性の参加をアピールするアフリカの女性

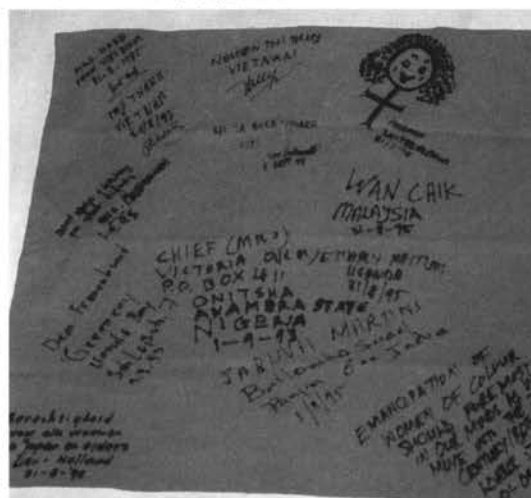


▲中国の「家庭教育が重要」と写真や手づくりポスターで紹介したコーナー



▼疾走するボスニア避難民の女性たちのデモ

▼世界の女性からのハンカチメッセージは「国際婦人年日本大会の決議を実現するための連絡会」のアイデア。11月22日、日比谷公会堂で開かれるNGO日本女性大会でリボンにされる



▼カンボジアの女性団体「ケマラ」の提案で実現した「世界を織る」。125カ国以上から寄せられ、1,500メートルにも及んだ



第4回世界女性会議 「行動綱領」12の重大問題領域

* * *

第4回世界女性会議では、350項目を超える「行動綱領」を採択しました。その中で、各国政府、非政府機関及び民間セクターを含む国際社会及び市民社会に、次の12の重大問題領域について戦略的行動をとるよう要請しています。

* * *

- 女性への持続し、増大する貧困の重荷
- 教育及び訓練における不平等及び不十分並びにそれらへの不平等なアクセス
- 保健及び関連サービスにおける不平等及び不十分並びにそれらへの不平等なアクセス
- 女性に対する暴力
- 武力又はその他の紛争が女性、特に外国の占領下に暮らす女性に及ぼす影響
- 経済構造及び政策、あらゆる形態の生産活動及びそれらへのアクセスにおける不平等
- あらゆるレベルの権力と意思決定の分担における男女間の不平等
- あらゆるレベルにおける女性の地位の向上を促進するための不十分な仕組み
- 女性の人権の尊重の欠如及びそれらの不十分な促進と保護
- あらゆる通信システム、特にメディアにおける女性の固定観念化及び女性のアクセス及び参加の不十分
- 天然資源の管理及び環境の保護における男女の不平等
- 少女の権利に対する持続的な差別及び侵害

※「行動綱領」についての詳細は、総理府男女共同参画室へ TEL (代) 03-3581-2361

(本誌編集部)



女性施設



クリップぽ〜ど

男の生活学

開設して14年目を迎える札幌市女性センターでは、平成5年度から「男性講座」を開講しています。

昨年、一昨年は、テーマとして健康や病気、衣食などを取り上げました。今年は「男の生活学」と題して、会社人間としてだけでなく「自分らしく」生きていくために、また生活技術の一部分(料理)を学ぶ機会として、さらに次世代を産み育てていくことのできる環境を築くために、という欲張りな内容で実施しました(10月4日-11月3日、全5回)。

性別役割云々といっても、実際に気づかず過ごしてきた人たちに、いきなりあれこれ言ってもなかなか抵抗があるものです。「料理などをきっかけに家事全般に目が向いたらいいな」と思いつつ、男性自らのこれまでの生き方を振り返ることを中心に進め、女性問題への理解を深める一歩であればと願っています。

女性センターと名のつく施設での講座に参加される男性に敬意を払いつつも、「個」としていかに自分を生かしていくかに行き着く講座になればと思います。

札幌市女性センター (館長 原本昌代)

〒060

札幌市中央区大通西19丁目

TEL 011-621-5177



NGOフォーラム・ワークショップ

女性とメディア

大阪府女性友好のつばさ

よねだ れいこ
米田 禮子

女性差別の解消にはさまざまな活動が必要だが、中でもメディアの変革は欠かせない。常々目にするマスメディアなどの性別役割分業を当たり前とする表現や、女性を「性的存在」としてのみ価値を置く女性像の流布などいらだたく思ってきた。

1991年に、大阪府豊中市の女性問題実務担当者会議は『ポスター・パンフレットなどにみる女性問題』という調査報告書をまとめ、私もメンバーとしてかかわった。行政が市民向けに発行している印刷物もまた女性差別を刷り込むメッセージを内包していることがはっきりした。女性政策を推進しながら、一方では女性差別を固定化し、再生産する印刷物を発行している矛盾に気づき、整合性のある施策推進の必要性を痛感した。メディアの変革には、消費者、受け手からのアプローチとともに、生産者、作り手の変革も欠かせない。特に、作り手に女性を増やす必要がある。その後、いくつかの自治体で印刷物の見直しが始まり、大阪府は『男女協働社会の実現をめざす表現の手引き』を作成した。

私はメディアを問う自治体や各地のグループとともにあらゆるメディアの変革を全国的な活動にして、女性をエンパワーするような女性像など、新しい表現を作り出したいと思っている。

そこで今回は、北京会議NGOフォーラムでワークショップ「女性とメディア」を行った大阪府による女性海外派遣事業「大阪府女性友好のつばさ」の活動取材した。

大阪府は世界女性会議派遣メンバーを公募

「メディア」は北京会議の「行動綱領」重大

問題領域12のうちの一つになっている。

「メディアにおける女性の表現について」というテーマでの公募に応じた会社員、公務員、教員など20～60代の女性20名が「大阪府女性友好のつばさ」のメンバーとなった。メンバーは9回の会議を積み重ね、「日本のメディア」における女性の描かれ方を「ポスター」と「阪神・淡路大震災の報道」に焦点を絞り、分析した。北京会議NGOフォーラムでは、収集した広告ポスターなどをずらりと張りめぐらして発表し、延べ60人を超える参加があったとのことである。次に発表の概要を紹介する。

発表Ⅰ「CM・広告などにおける女性の描かれ方～STOP THE 性別役割分担」

掃除機・洗濯機などの家電製品の広告ポスターをはじめ、食品の宣伝パンフレットも、女性が笑顔で配されているなど、「家事は女の役割」とした宣伝・ポスターが圧倒的に多い。視覚に訴えるポスター類はきわめて穏やかに意識に浸透し、認識を定着させ、性別役割分担意識を再生産する作用を果たしている。

一方、「男女共生社会」を作ろうとするポスターを探したが、炊事・洗濯を両性でやっているポスターをわずかに入手したにすぎなかった。また、枚方市が小中学生に呼びかけ、応募した「男女共生社会」をめざす600枚のポスターには、家事によって社会活動を阻まれている母親の怒りや、十二単衣でサッカーをする姿、男性が掃除する姿などが表現され、新しい女と男の関係をつくり出そうとする世代が育ちつつあることもわかった。家電製品のメーカーにポス

ターの制作意図を問い、「男女共生社会」を目指す表現に変えていくよう要望したい。また、「性別役割分担意識を内面化している私」を点検し、周りの人々に意識変革を呼びかけたい。

発表Ⅱ「阪神・淡路大震災における女性の描かれ方」

性別役割分担や「女らしさ・男らしさ」のイメージを再生する新聞報道の偏りについて5点に分類した。

①アイキャッチャーとして使われているのは子どもと女性が多い。男の子は力仕事を手伝う場面で、強くたくましい男らしさを印象づけ、逆境に主体的に立ち向かう姿である。一方、廃墟の町の少女や自衛隊の作業をバックに立ち尽くす少女というように、少女の場合は無力な姿を強調。中年以上の女性は市場での買い物、川での洗濯など性別役割分担にはまった描き方そのものという具合に、ステレオタイプの描写である。②被災地で救助活動をしている女性の医師や看護婦を「女神」と表現＝「人間」のカテゴリーから外し、「ニコリ・笑顔」とやさしさを求め、本来の医療活動の内容報道は皆無。一方、同じ活動をしている男性を「男神」とは言わず、活動内容を紹介。③被災地から交通マヒの中、出勤した男性は美談として報道。社会を支える男性を強調。しかし、看護婦や公務員など不眠不休で社会を支えた女性も多くいた。④家族が困難に立ち向かう姿が多く報道され、家族像をことさら強調。実際には、家族を超えた人と人の支え合いがあったし、親世代とのにわか同居のいざこざなどの問題も出てきている。⑤大人の女性は子どもとペアで扱われ、母としての役割をことさら強調する報道が目立った。

対話は活発だったが……

発表のあと、デンマークやスウェーデンの女性から、「男性でも簡単に扱える洗濯機という



宣伝がされている」と自国の状況が出され、さらに「大切なのは性別役割分担の実態を変えていくこと」との発言も。中国の男性からは「家事をやっています」など、意見が活発に交わされたとのこと。

しかし、メディアの変革の問題としては、議論は深まらなかったようだ。カナダやアメリカでは表現にかかわるガイドラインが作成されるなど、欧米での進み具合を聞いていた私は、活動推進に示唆的なみやげ話を期待したが外れた。

問われているこれからの活動

「メディアに関するNGOの取組を一つの場所に集めるなど、もっと有機的なつながりが欲しかった」「今までの批判された日本女性の世界女性会議への参加の仕方は克服したものの、これからの活動が問われていると自覚している」「北欧の女性の発言から女性政策が日本よりはるかに進んでいることを改めて感じた」「女性問題の認識・活動と同時に語学力も大切と痛感した」などの参加メンバーの声。でもやっぱり開口一番は「参加して良かった」。これがこれからの「力」になることを期待したい。

問題はこれからどのような活動を展開するかだと思う。日本の現状報告の発表だけに終わってはならない。メディア変革のための行動が問われている。個々人の活動はもとより、派遣した大阪府にも問われていることだと思う。

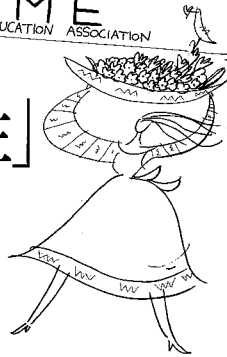
(本誌「女性の活動」レポーター)

◇連絡先(夜間) 米田宅 TEL 06-848-0682



NGOフォーラム・ワークショップ

パネルで示した「教育」「開発と女性」

しずま としこ
静間 敏子

9月1日、北京から懷柔県へ向かうバスのフロントガラスは、烈しい雨にたたかれていた。「今ごろとしては珍しい雨。すぐやみますよ」と慰めてくれるものの、せつかくのワークショップを見に来てくれる人がいるかしらと心細くなる。

私たち社団法人 国際婦人教育振興会に割り当てられた会場は、メインゲートを入って程近い、懷柔第一中学校の2階の教室で、11時から13時まで2時間であった。しかし、9時から始まるリビアのプログラムに主催者がだれも来ない。NGO会場の変更や準備の整わないことで、登録3千団体の2割以上が実施をあきらめたという。

1 雨の中の呼び込み

30分も早く準備が許されたことで、案内、呼び込みの係が雨の中、街をかけて行く。英語を話せる人、派手な浴衣に編笠の「おけきスタイル」のこの人たちがチラシをまいてくれたおかげで、宣伝効果てきめん。続々と人々が私たちの部屋へ詰めかけたのである。

2 交流地図は大人気

入口近くに、2メートルの世界地図を張る。本会は、世界189カ国のうち3分の1近い58カ国と交流を持つ。その国を緑、赤、青、紫、黄などで色どり、周囲にカラフルな万国旗を配した。この交流地図は訪れる外国人との会話のきっかけとなり、「あら、私の国にも来たことがあるの」と喜ぶケニアの人、「今度ぜひおいでください、お役に立ちたいから」と名刺を差し出す香港の大学教授。「これは私の国の旗」と誇らしげに言ったパプアニューギニアの人もいた。

25年間、毎年100人もの女性を世界各地の視察に送り出し、さらにここ5年はアジアのリーダーを5人ずつ招へいし、ネットワーキングをしてきた実績が実ったものと、握手する手に力がこもる。

3 活動をパネルで展示

展示のテーマは「教育」と「開発と女性」である。国際婦人教育振興会はその名のとおり、教育をテーマに世界の国と親しい関係を結んできた。幼児から成人まで、生涯教育の施設や学校を訪問し、また女性団体とのネットワークを組むなど、交流の歴史は長い。その交流の中からジャカルタの家庭保健財団、中国の保育所、中国婦女連、ナイロビの世界会議、マリ共和国の小学校、ジュネーブ国連欧州本部、トロントの病院などのカラー写真とその解説を、中国語、英語で書いた。支部報告としては、長野支部の「小諸市外国人支援ネットワーク」、東京支部の「女性の政治参加」などを行なった。前者は小諸市に住む外国人の自立を助けるため日本語教室や妻の国の言葉を学ぶ夫の会などユニークな活動を紹介したもの、後者は東京で女性議員を当選させるまでの苦しい道と大きな喜びを表した展示である。また、千葉支部からは高齢者の切実な問題が提起された。

もう一つのテーマ「開発と女性」では、文部省補助事業として平成2年度から始めた、インドネシア、マレーシア、タイ、中国、ベトナム、ネパールとの交流を紹介した。これらはその国の女性の自立をサポートし、女性の眼から見た社会開発を支援した事業である。展示の前はラッシュ時の電車さながら、説明の声も届かない。

「平和を願って」の手作り紙芝居
パプアニューギニアの人たちと一緒に
原爆を考える



私たちは英語と中国語で書いた提言「ODAを開発途上国女性の教育と自立のために役立てること」を配ってアピールした。「日本の発展に女性のNGOはどうかかわってきたか」（アルゼンチン）、「この地図のブランクの国はどういう理由で行かないのか」（香港）、「このフォーラムに参加した目的と今後の抱負」（中国のNGOと交流しているか）（中国）「フランスの核実験についてどう思うか」（パプアニューギニア）など、新聞社の取材も交えて活発な話し合いがもたれた。

4 工夫の原爆紙芝居

核実験で世界が騒然となっている今日、唯一の被爆国である日本は黙っていてよいものか。山梨支部は「平和を願って」という広島原爆についての紙芝居を作った。みんなで描いた18枚の絵。忌わしいきこ雲に始まり、逃げまどう子ら、死んだ母の胸にしがみついた幼子、黒い雨、死。パプアニューギニアの人は涙ぐんで「私たちも魚ばかり食べているから海の汚染は恐ろしい」としみじみ語った。

5 お茶で接待

日本の伝統文化の紹介のため、涼やかな白地着物に紺色の帯もきりりと、「おうすを一服」の茶席が設けられた。初めての日本の薄茶に、恐る恐る口をつける人、がぶ飲みをして顔をしかめる人、小さなお菓子をゆつくり味わう人、順番待ちの列ができ、140人分準備したお菓子も1時間半ほどでおしまいになった。一方、会員が持ってきた日本の湯のみでお煎茶やお水を馳走し、器はそのまま土産として持ち帰ってもらうというコーナーでは、100個の器は1時間でなくなった。「何焼ですか」と聞く中国の人もいた。

6 会場でとったアンケート

ワークショップのテーマに合わせ、男女平等、

女性の自立、国際協力についてのアンケートを英語、中国語、日本語で作る。応じてくれた人は、英語で60人、中国語で34人、日本語で56人である。英語で答えた人の国籍は21にもものぼるが、アジア、アフリカ、オセアニアの人が多い。

以下にアンケート調査の大まかな結果を紹介してみよう。

- 男女平等に関しては、中国語の回答では、学校・職場は平等、習慣に不平等感が、英語・日本語の回答では、学校は平等、習慣・職場に不平等感があつた。
- 性別役割分担には、三者とも反対意見が多い。
- 管理職における男女比率では、いずれの国も男性が圧倒的に多く管理職に就いている。
- 女性の自立について必要なものは？
中国語：経済力、教育、男性の理解
英語：経済力、法律制度の改正、教育
日本語：経済力、男性の理解、法律制度の改正
- 国際協力のために何が大切か？
中国語：外国語習得、ネットワーク、国際理解
英語：ネットワーク、実践、情報収集・提供
日本語：ネットワーク、ODA資金活用、継続的な活動

私たちのワークショップを訪れた人の国籍は47（アジア19、アフリカ10、欧州7、太平洋4、南米4、北米3）であつた。カラフルな民族衣装、さまざまな言葉の飛び交う中で、私たちは「世界は一つ」とひしひしと感じたのである。

（社団法人 国際婦人教育振興会副会長）

◇連絡先 同会事務局 03-3436-5877



女性NGOフォーラム北京'95参加日誌

たまの ちえこ
玉野 千恵子 (富山県)

8月30日。午前零時、工人体育館はIDカード受領の人、人、人であふれていた。肌の色、服装、言語の異なる人々の中に身を置いて、改めて“世界”を実感する。

8月30日午後5時。北京のオリンピックスタジアムでの開会式に参加。2万7千人の世界の女性たちと時と空間を共にし、“平等”“開発”“平和”の旗のもと、「世界はひとつ」の感を強くする。地鳴りのような拍手と歓声の中を挨拶に立たれた陳慕革世界女性会議議長、ガートルード・モンガラ同事務局長の力強い言葉、「女性の人権の真の確立を目指し、確かな変革を求めて行動を開始しよう」に、会場は感動と興奮のつぼと化す。かくして、女たちの熱い討議の幕は切って落とされた。

8月31日。懷柔県におけるワークショップに参加する。多くの国のさまざまなアピールの中でも、貧困と差別、識字教育の問題を訴えるアフリカ女性の真摯な姿が胸に迫った。

9月1日。土砂降りの雨の中、私たち富山県婦人会のワークショップを開催する。テーマは、「ふるさと富山の自然と私たちの暮らし」。環境問題を中心として、国際交流、青少年健全育成など、英文説明をつけたパネルを展示して交流する。100余名の来訪者と環境問題を中心に活発な討議が行われた。日常生活からの情報発信と自負はしてみても、豊かさに浸っている日本人としての鋭い反省が脳裏を走る。まさにエンパワーメントを自らに誓った貴重な体験であった。

おばさん北京に行く

みうち そのえ
三浦 園江 (東京都)

1975年、共立講堂で行われた「国際婦人年日本大会」に参加した地域の学習仲間8名でデモ行進の後、市川房枝先生と握手したと興奮して喜び合ったのを昨日のことにように思い出す。3人の子どもを無事に育てただけの平凡な家庭の主婦の私が、1985年日比谷公会堂で開催された「国連婦人の十年日本大会」には準備の時からお手伝いするご縁に恵まれ、この日本大会を主催した国際婦人年連絡会で学ばせていただいている。

そして今年、その連絡会の一員として北京会議のワークショップ「労働と福祉における不均等な発展」に参加。仲間と共に役割分担を決めポスターを手作りし、準備を進めるうち、英語で開会の挨拶を私にという話が出た。無理と思ったが、初めの半分を英語で、後は通訳をお願いすることで引き受けた。娘がシナリオを書き、挨拶を英訳し、リハーサルをしてくれた。

当日は雨で、朝一番の9時開始だったのに満席、後ろに立つ人も多かった。前の晩の練習を聞いた友が「もっと笑顔で」と言ったのを思い出しながら、足もとをしつかり踏まえ第一声を出す。どうにか震えないで声が出せホッとする。若い仲間がきれいな英語で問題提起をし、司会進行役と通訳との連携もうまくゆき、みんなの協力で質問にも活発に応答できた。メンバーのチームワークもよく、無事終わった。

20年前遠くで鳴る鐘のように聞いていた世界女性会議に、普通のおばさんの私が参加できたのは、学び続けたおかげと感謝している。

こ・の・ひ・と

ばんどう く み こ
板東久美子さん

文部省生涯学習局婦人教育課長



今年4月に課長就任。世界女性会議に臨まれた板東さんに、政府間会議の様態とそれらを踏まえた婦人教育への抱負をお話いただきます。

政府間会議では、「行動綱領」及び「北京宣言」の採択をめぐり、セクシャル・ライツや家族の形態、親の責任の問題など、宗教や文化と人権とのかかわり合いという極めて難しい領域において各国の意見の厳しい対立をみました。しかし、女性の地位向上や問題解決のために何としても

行動綱領をまとめあげ、会議を成功させたいとする参加者の意欲も大変強く、対立の構図を超えて成案が得られていく過程が印象的でした。

わが国政府首席代表（野坂官房長官・女性問題担当大臣）演説で、女性のエンパワーメントや男女の対等なパートナーシップの実現の観点から教育の重要性が指摘されました。各国政府代表も教育を最重要課題として取り上げることが多く、世界的視野から教育の問題を考え、国際協力にも積極的に取り組む必要性を感じました。

行動綱領では、教育の章で、女性の教育へのアクセスの確保、男女差別のない教育過程・教材、生涯学習の推進などがあげられていますが、教育以外の章でも、健康・性・人権などをめぐりさまざまな教育の取組が求められています。

日本は、「女性の教育の機会」では、学校教育・社会教育共に優れた実績をあげていますが、真の社会参画につながる進路指導や社会教育プログラムの開発等に努力すべき点があります。

今後の婦人教育では、「女性のエンパワーメントのための教育」に加え、「男女の対等なパートナーシップの推進のための多様な教育」が必要で、男性の意識変革のための学習や、若者が社会・家庭を形成していくうえでの共同参画のあり方を考える学習機会の充実が課題です。

きょうのキーワード

法制審議会民法部会は本年9月、来年答申予定の「民法改正要綱」の大枠として、“選択的夫婦別姓導入”“5年以上の別居を離婚原因に”等を決めた「婚姻制度等の見直し審議に関する中間報告」を公表。

夫婦別姓については、「婚姻制度等に関する民法改正要綱試案」で3案を併記意見を問うていましたが、このほど「選択的夫婦別氏制度」の導入を決め、夫婦の氏は、婚姻の際、同氏となるか、別氏となるかを選択するものとしています。なお、別氏夫婦の場合、子の氏は統一し、婚姻の際に決めることとしています。従って夫婦は別氏でも、きょうだいは同

夫婦別姓・離婚

じ氏となります。既婚夫婦の場合、改正法施行後1年以内は、届出によって別氏夫婦となることができるとしています。なお、改正法施行後に婚姻した夫婦の氏の転換はいっさい認められません。

離婚原因については、試案と同様、破綻主義の明確化の観点から、5年以上の共同生活の不存在を具体的離婚原因とすることを決めています。ただし、これを理由とする離婚請求については、婚姻中の協力・扶助を著しく怠ったことにより離婚請求が信義に反すると認められる場合には、その請求を棄却できることを明示することとしています。



記録映画

『杉の子たちの50年』

12月4～8日、11・12日に岩波ホール（東京）にて公開



学童疎開から明日へのメッセージ

第2次世界大戦中、学童疎開は日本ばかりではなくドイツや英国でも行われ、英国では戦後の児童福祉政策に影響を及ぼしたといわれている。

日本では小学校3～6年生が対象になった。敗戦の前年の1944年8月4日に東京から第1陣が出発したが、その規模はわずか1年余りの間に、全国で40万人を上回ったといわれている。

この映画は、自らも学童疎開経験のある藤原智子監督が同世代の女性24人の協力を得て、東京や沖縄の疎開体験者の男女30数人を取材、当時の記録写真や資料をふんだんに盛り込んで1時間40分の長編記録映画にまとめた。

還暦を過ぎた元疎開児童らは口々にひもじく寂しくつらかった疎開体験を、まるできのうのこのように生き生きと語る。その内容は単なる思い出話にとどまらず時代の証言ともなり、またわずか1年足らずの経験が生涯心の傷になり、あるいは人生の消えがたい課題として生き続けていることに驚かされる。

国民全体が物心両面で追い詰められた状況にあつて、引率教員の一人は当時を回想して「まず、子どもの命を預かる責任、第2は子どもに食べさせること、教育はその後だった」と苦笑いする。その言葉のとおり、薄暗い寺の本堂に布団を敷き詰めて寝起きする子どもたちの、やせ細った手足。ひもじさからか、到着の日から帰京するまでの半年間、一日も欠かさず朝・昼・夕食の献立を記録していた男の子の日記。

戦地の父親と疎開中の幼い娘とがやり取りしたこまやかな愛情にあふれた手紙も残っている。

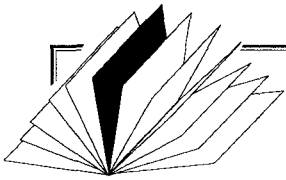
疎開先で東海大地震、三河地震と相次ぐ大地震に見舞われて幼い命を落とした子どもらも多かった。これらの地震は、関東大震災にも匹敵するほどの大災害だったが、戦時中の報道管制でほとんど報道されなかったという。

疎開した寺の隣の農家の少女が目の前で機銃掃射で即死、寺も炎上、その後東京大空襲で孤児になった少年は、50年後の今でも、好きだったその少女の面影を切り絵に刻んでいる。沖縄から九州に向かった疎開船「対馬丸」で敵の魚雷攻撃の犠牲になった770人余の学童の遺族は今も遺品を手に沖を見つめ、生存者は亡くなった人への申し訳ないという気持ちから逃れられない。

集団生活の中では陰湿ないじめも横行した。上級生に殴られてできた頬の青あざを先生に見とがめられた下級生は、その訳を全身で訴えながら、仕返しを恐れて口では「寝ぼけて自分で柱にぶつかって」と切ない嘘をつく。そばで聞いているだけで助ける勇気のなかった友達は50年たっても自責の念から逃れられない。

みんなで唱歌を歌いながらけなげに生き抜いた疎開生活一穏やかな語り口だが、戦争が幼い者たちに強いた犠牲を通して描く見事な“昭和史”の断面である。戦後50年にふさわしい作品。いま同世代の小学生や戦争を知らない親たちにぜひ一見をお勧めする。

（ジャーナリスト・松本侑壬子）



ざ・ぶっく

『育児で会社を休むような男たち』

男も女も育児時間を！連絡会（育時連）編

ユック舎 1995年 1,648円

もし育児休業を取る男性がいれば、それは新聞のニュースになるくらい珍しいというのが現実。そのニュースになるような男たちが体験を語っている。モデルがないだけに大変な生活を選択したとも思えるが、仕事に縛られていた自分を相対化し子育てを通して新しい世界を手に入れた彼らは、悩みながらも生き生きと生活しているように感じられる。

『女性学教育ネットワーク'95ー関西の女性学教育の調査・実践報告ー』

女性学教育ネットワーク事務局編 1995年 2,000円

関西の大学で行われている女性学の授業の状況をアンケート調査の結果を中心にまとめたもの。調査結果はもちろん興味深いのであるが、それ以上に、ネットワークを作り大学そのものの改革を進めていこうとする関西の女性の行動力と熱意に圧倒される。なお購入は直接事務局に電話で（Tel.06-952-2291）。

『エンパワメントの女性学』

村松安子他編 有斐閣 1995年 1,854円

エンパワメントとは「力をつけること」。しかしこの言葉には、単に個人が力をつけるだけではなく、世界の女性が草の根レベルで連帯し、共同で行動して世界の女性の状態を変えていこう、という意味が含まれている。今年は第4回世界女性会議が北京で開かれ世界の女性の力が大きく示されたが、本書では、今後世界の中の日本の女性が問題とすべき課題が展開されている。

『スウェーデン発 高齢社会と地方分権ー福祉の主役は市町村』

斎藤弥生、山井和則著 ミネルヴァ書房

1994年 2,200円

スウェーデンの高度に進んだ福祉の根幹には地方分権のシステムがある。これが2年半スウェーデンで生活し精力的に研究、取材を行った著者たちの一つの結論である。高齢社会の問題は経済の問題ととらえがちだが、スウェーデンと日本の福祉の状況の違いは、地方政治に対する私たち個人の實力の違いから生じているとも言えるのである。（本誌編集部）

次号のお知らせ

巻頭言 林 陽子

特集 平成7年度フォーラム「女性と学習」

「参画へのステップアップⅡ
ー実践活動の新たな試み」

学習実践；「女性問題と話し合い学習Ⅱ

『主婦が働くということ』 松田 庄子

女性政策を考える自治体職員のネットワーク；
「グループみこし」 米田 禮子

女性の声を行政・政治に；
「牟礼女性フォーラム」 柴野 初代

ミニ提言・参画へのステップアップのために

Women's View

このひと 鈴木 瑠美さん

きょうのキーワード

ざ・ぶっく



まろやかな風味の おしょうゆです。





キッコーマン

特選 丸大豆しょうゆ

12マンパック 430円
(希望小売価格には消費税は含まれておりません。)

募 集

次代に残す100人の言葉

—女性、団体活動、戦争・平和—

財団法人 日本女子社会教育会は、その前史として昭和5年に家庭教育の振興を目的として発足しましたが、昭和という激動の時代の中にあつて広く婦人教育活動をすすめて、さまざまに変化を遂げてきました。戦後50年を機に、女性に関係の深い団体活動を中心に昭和の軌跡を見つめ、「次代に残す100人の言葉」を募集します。

◇テーマ 「次代に残す100人の言葉」

—女性、団体活動、戦争・平和—
女性、団体活動、戦争・平和などについて、激動の昭和を振り返つての思い、次世代に伝えたい体験談など

◇応募資格 テーマに関心をもつ男女

◇原稿枚数 本文400字以内(縦書き ワープロ可)。別紙に、タイトル、氏名、住所、電話番号、年齢、職業を明記してください。

◇締切り 平成7年12月25日(月)(当日消印有効)

◇入 選 100篇

- ・本会で選考し、平成8年1月末日までに入選を決定します。
- ・応募原稿は原則としてお返ししません。
- ・入選原稿には、薄謝を差し上げます。

◇『次代に残す100人の言葉』の作成

入選した原稿を『次代に残す100人の言葉』としてまとめ、冊子を作成します。
なお、入選された方には1冊ご送付します。

図 書 案 内

家庭や家族を取り巻く環境や人々の意識の変化の著しい現在、婦人教育や家庭教育をめぐる新たな課題が浮上しています。本会は、個人にも、グループ関係の学習にも役立つ学習情報として、各種調査データをもとに、やさしくわかりやすくまとめた図説シリーズを発行していきます。図説を資料に学び合ってみませんか!

【図説】 変わる結婚と家族
A 5判 64頁 800円

【図説】 変わる家族と乳幼児
A 5判 64頁 700円

【図説】 変わる家族と小・中学生
A 5判 70頁 700円

【図説】 家庭教育に関する国際比較調査 報告書
A 4判 328頁 2000円

日本、韓国、タイ、アメリカ、イギリス、スウェーデンの6か国の0歳から12歳までの子どもをもつ親6000人対象の調査から、日本の家族・家庭教育の姿をクローズアップ。

(いずれも申込は本会まで)

編 集 後 記

◆ 第4回世界女性会議NGOフォーラムでは、アジアで初めてという状況もあり、アジア各地からパワフルな多くの女性たちが参加し、「21世紀はアジアの時代」と言われる前兆を見る思いがしましたが、エネルギーあふれるアフリカ女性のパワーも目立ちました。

◆ 日本全国から参加した多くの女性も画期的な活動を展開し、個人、グループ・団体ともに貴重な経験をしたことと思いますが、本誌の視点で特集を組んでみました。2000年に向けて、この機会が一人でも多くの人々のバネになることを願いつつ……。(小)

「女性教養」年間購読のおすすめ

購読料 3,300円(送料共) 振替 00170-5-74200

女 性 教 養 11月号 (No.517)
平成7年11月1日発行
編集・発行者 志 熊 敦 子
発 行 所 財団法人 日本女子社会教育会
〒105 東京都港区芝公園2-6-8 日本女子会館
TEL 03(3434)7575
FAX 03(3434)8082
印 刷 株 工 博

* 本文は再生紙を使用しています。

* 無断転載はお断わりします。